

悲劇と統計——スターリンは本当にそんなことを言ったのか？

沼野 充義

すでに人口に膾炙している引用句について、いざその起源を調べると、意外にもよくわからない、ということがよくある。ロシア文学関係者にとってその代表的な例は、「われわれは皆ゴーゴリの『外套』から出てきた」(Все мы вышли из гоголевской шинели) というものだろう。これはしばしば(おそらく)誤ってドストエフスキーに帰せられ、ゴーゴリ⇒ドストエフスキーの継承関係を示す名言としていまだにあちこちの本で繰り返されているが、最初の出所を調べようとする、意外に大変である。例えば江川卓の小さな名著『ドストエフスキー』(岩波新書、1984年)でも、それは「ドストエフスキー自身の言葉と伝えられる」として取り上げられている。しかし、じつはドストエフスキーがいつどこでこのようなことを言ったのか、まったく突き止められていないのである(少なくとも活字になった文章や手紙にはこの種の文言は見当たらない)。

一般にはフランス語の著作『ロシア小説』(1886)で知られるロシア通のフランスの外交官メルキオール・ド・ヴォギュエが、ドストエフスキーの言葉として紹介したということになっているのだが、その原典にあたってみると、もっと曖昧な言い方になっていて、ドストエフスキーの発言とは特定されていないのである(原典にちゃんと当たらなくては!)。ド・ヴォギュエの『ロシア小説』は、西欧におけるロシア文学発見のために貢献し、西欧のロシア文学熱に火をつけた著作として有名で、当時は広く読まれていたが(おそらくかつては日本でもフランス語の原文か、英訳で読んだ者は多いに違いない)、いまではほとんど読まれていないようなので、改めてここで該当箇所を確認しておこう。ド・ヴォギュエはこんなふうに言っている。「ロシアのことを研究すればするほど、ロシア文学の最近の三、四十年の歴史によく通じているあるロシア人が私にしてくれたコメントの正しさに気づかざるをえない。彼は『われわれは皆、ゴーゴリの<外套>から出てきた』と言ったのである。この作品がどれほどドストエフスキーの作品に影響を与えたかについては、あとで見ることにしよう」。

ではどうして、これがドストエフスキーの言葉として一人歩きしてしまったのか？ その経緯を当時の文献にあたっただけでかなりの程度まで推測することに成功したのが、ソロモン・レイセルというソ連の文学研究者である。彼は、1968年と1971年に発表した二つの小さな覚書で、「みなゴーゴリの『外套』から出てきた」というのは当時かなり広く言われていたことであって、トゥルゲーネフも口にしていたらしく、ドストエフスキーが言ってもおかしくはないが、彼一人には帰せられない、という説得力ある結論を導

いているのだ。些細とはいえ、かなり重要な発見ではないか。しかし、発見の成果はなかなか共有されず、伝説が相変わず一人歩きを続けている（試しにいまインターネットで検索したら、ロシア語の引用句のサイトで、ヴォグユエやレイセルに言及しながらもまったくでたらめな記述をしているものが見つかった。やれやれ）。

一人歩きを続けている「名句」といえば、私にはもっと気になる現代的な重い意味を持ったものがあって、長年折に触れて出典を調べてきたのだが、いまだによくわからない。それは誰でも一度は聞いたことがあるだろう、「一人の人間の死は悲劇だが、百万人の死はもはや統計である」という言葉だ。

私はまだ大学に入ったばかりのころ、この格言を石原吉郎の評論集『望郷と海』で知って衝撃を受けた。そこで詩人は、「百人の死は悲劇だが、百万人の死は統計だ」という言葉を（数字がちょっと違うが）ナチスドイツの親衛隊中佐アドルフ・アイヒマンが言ったものとして引用していたのである。

その後、いろいろな本を読んでいるうちに、この言葉を（数字にはいろいろなヴァリエーションがあるが、どれも実質的に同じものと考えてよい）アイヒマンではなく、スターリンに帰している文献にしばしば出会った。ロシアの専門家も時々これをスターリンの言葉として引用する。たとえば亀山郁夫の『磔のロシア』（岩波書店）は高く評価されて大佛次郎賞を受けた立派な研究書だが、その後書きでも「スターリンは『一人の人間が死ぬときは悲劇だが、何万人の人間が死ぬときは、統計だ』と語ったという」と、出典を明示しないまま伝聞情報として言及している。

アイヒマンもスターリンも、ドイツとソ連という国の違いこそあれ、全体主義時代の大量殺人の象徴のような存在だから、確かにどちらが言ってもおかしくないという感じはする。あるいはスターリンの言った言葉をアイヒマンが知っていて、借用したのか。そういえば、石原吉郎はシベリアに長年抑留された経験を持つ詩人である。その彼が、ソ連のラーゲリの極限状態を厳しく描き出した本の冒頭に、ナチスドイツの大量殺人の論理を端的に要約した引用句を持ってきたことも、うなずける。

しかし、彼らがいつどこでそういうことを言ったものか、ある時気になって調べてみたのだが、意外なことにどうしても確かめられない。まずスターリンのほうだが、考えてみれば、いくら彼といえどもそんな言葉を公に口にしたり、手紙に書いたりするわけがない。スターリン全集のどこを探してももちろん見当たらない（というのは私から問合せを受けた気の毒な歴史学者の答であって、私が自分でスターリン全集をぜんぶ隅から隅まで点検したわけではないのだが）。英語の引用句辞典などにも“A single death is a tragedy. A million deaths is a statistic.”という形で収録されているが、たいていの場合、「スターリンのものとされる」といった但し書きがついていて、スターリンの言葉とは断定されていないのである。とすると、あのスターリンならそのくらいのことは言

いかねない(確かに、彼が内心そう考えていたとしてもおかしくはない)、と考えた人々の生み出した一種の「フォークロア」だろうか(ちなみに「あのスターリンならこれくらいことは考えかねない」という類の想像力によってスターリンの内面をソ連で初めて描いて話題になったのが、アナトリー・ルィバコフの『アルバート街の子供たち』だった)。そうだとすれば、これはスターリン・フォークロアの探求者としておなじみの、あのユーリイ・ボーレフが収集したアネクドートのリストに加えるべきもののなか。

その後、ロシアの出版物の中では、コンスタンチン・ドゥシェンコという人の編集した『現代引用句辞典』において、「Смерть одного человека – трагедия, смерть миллионов – статистика.»(「一人の人間の死は悲劇、百万人の死は統計」)という形でスターリンの項目に収められていることがわかったが、そこには「英語の文献でこの言葉はスターリンに帰せられ、しばしば[その出所として]チャーチルが引き合いに出されるが、出典は示されていない。印刷物には遅くとも 1958 年には登場している」という説明が添えられているので、この「引用句」は主に西側で広まったものであって、少なくともロシア語の文献に典拠はない、ということのようだ(Душенко К. В. Словарь современных цитат. М., 1997. С.345.)

一方アイヒマンのほうはどうか。インターネットで検索すると、スターリンの言葉と混同され、文章自体も微妙に混じり合っていることもしばしばなのだが、より正確には「百人の死者はカタストロフだが、五百万の死者は統計だ」“One hundred dead is a catastrophe. Five million dead is a statistic.”という形でアイヒマンに帰されていることがわかった。そこで、もし彼が実際にこんな驚くべきことを言ったとしたら、やはりイェルサレム裁判あたりで自己弁護のためか、と見当をつけて、ハンナ・アーレントの有名な『イェルサレムのアイヒマン』や、イスラエル警察によるアイヒマン尋問調査などを覗いてみたが、やはり見当たらず。周知のようにこの裁判でアイヒマンは、自分は命令に従っただけで無罪だ、と言い張り続けた。そんな人間がこれほどふてぶてしい(おそらく自己弁護にはならない)言葉を吐けるわけがない。やはりこれも一種のフォークロアなのか？

そこで、ある時私は「『一人の死は悲劇だが、百万人の死は統計だ』とは本当にスターリンやアイヒマンの言った言葉だろうか？ どなたか正確な出典を知っていたら教えてください」と、アメリカのロシア研究者メーリングリスト SEELANGS に投稿したのだった。これは千人を越えるロシア・スラヴ語学文学研究者が参加する巨大な知のネットワークで、第一線の世界的な学者も多く含まれているため、どんな問題でも必ず専門家が現れて、解決してくれる。現代の集会的知とはすごいものだ。

ところがこの時はちょっと様子が違っていた。「ドストエフスキーがどこかでそんなことを書いていたような気がするけど、『罪と罰』を読み返してみたら」とか、「いえ、そ

れはもともとシェイクスピアですよ、確かその種の台詞がどこかにあったと思う」といったかなりいい加減な投稿のあとに、「ばかばかしい。シェイクスピアの時代に『統計』なんて言葉が使われているわけがない」という反論が続き、「いや、これはラスコーリニコフに影響を与えたナポレオンに違いない」「そういえば、チャップリンの『殺人狂時代』にも確か同じような台詞があったのではないか」といった発言が次々に飛び出して、議論百出だったが、結局、出典問題は解決しなかったのだ。

ただし一つ教えられた大事なことは、18世紀イギリスの詩人エドワード・ヤングに「一人を破壊するのは法によれば殺人だが(……)、何千人も殺害すれば不滅の名声を得られる」(Edward Young, *Love of Fame*) という名句があり、同じく18世紀イギリスの主教にビールビー・ポーティウス Beilby Porteus という人がいて、彼が書いた詩にも「一人殺せば悪党だが、何百万も殺せば英雄だ」“One murder made a villain, / Millions, a hero.” という一節があるということだった。

考えてみれば、よく聞くタイプの箴言で、平時には犯罪行為と見なされる殺人が、戦争になると大量に犯せば犯すほど賞賛されてしまう不条理を言ったものだろう。それが20世紀になると、ヒトラーやスターリンによるもつとすさまじい統計の領域のホロコーストにまで進化したということか。ちなみに大きな統計的数字が人間の想像力を超えた抽象に化してしまうのに対して、詩人が扱うべきは小さな数の個々の具体的なものだというモチーフは、全体主義に抗して詩を書いた優れた20世紀詩人たちにしばしば認められる。たとえばポーランドのズビグニェフ・ヘルベルトは、「コギト氏」(1974) という詩篇のなかで次のように書いていた。

120人の戦死者となると
地図の上にさがしてみても無駄なこと
大きすぎる距離が
ジャングルのように彼らを覆う

想像力に訴えてこないのだ
あまりにも数が多すぎる
最後のゼロという数字が
彼らを抽象概念に変えてしまう

よく考えてみるべきこと——同情の算術

同じくポーランドのヴィスワヴァ・シンボルスカによる「大きな数」(1976) は、これ

に呼応するものだろう。

この地上には 40 億の人たち
でもわたしの想像力はいままでと同じ
大きな数がうまく扱えない
あいかわらず個々のものに感激する

全体や統計を扱うことを得意としていた社会主義の時代にこういう詩を書けるのは、なかなかすごいことだ。同じ時代のソ連にこういう詩を書いた詩人はいないのではないか。ポーランドとロシアの違いだろうか……。

話題がそれてしまった。閑話休題。結局、ロシア専門家の巨大メーリングリストの力を借りても、スターリンとアイヒマンの（ものとされる）言葉の出典ははっきりしなかった。そんなことをぶつぶつ言い続けていたら、ある日、今度は印欧言語学の碩学から、思いがけない情報をいただいた。これは第2次世界大戦後、国際的に広く読まれたドイツの作家レマルクから来ているのではないか、彼の『黒いオベリスク』（1956）という長編には、*Aber das ist wohl so, weil ein einzelner immer der Tod ist — und zwei Millionen immer nur eine Statistik.*（「でも確かにそうですよ、一つだけならいつでも死だが、二百万となると常に統計なのだから……」）という表現が出てくる、というのである。なるほど、確かにこれはよく似ている。じつはちょうどその頃、先に引用したドゥシェンコの『現代引用句辞典』の新版が出たという新刊情報を得て、けっこう高い辞典だし、そもそもこれ以上辞書を買ってこんでも家にも研究室にも置き場がないからどうしようかとしばらく悩んでいたのだが、「増補改訂版」という宣伝文句につられてモスクワから取り寄せたところ、なんとこの引用句に関する説明が増補されていて、やはりレマルクの小説中の言葉をパラフレーズしたものではないか、という推測が示されているではないか！ レマルクの小説のロシア語訳では、この句は「Смерть одного человека — это смерть, а смерть двух миллионов — только статистика.」（「一人の人間の死は死だが、二百万人の死は統計に過ぎない」）となっているという（上掲のドゥシェンコ『現代引用句辞典』増補改訂第四版、2007年、454-455 ページ）。なるほど、レマルク出典説はもう広く国際的に認知されつつあるのだろうか（それにしても、このドゥシェンコという編纂者、どういう人か知らないが、これ以外にも数多くの引用句辞典を独力で作っていて、恐るべきエネルギーである。おそらく朝から晩まで世界中のいろいろな名句の出典を調べまくることに人生を捧げているのではないだろうか）。

だが、待てよ。レマルクはこの言葉を自分で考え出したのだろうか？ ひょっとしたら、これもまた誰かがすでに言ったことで、レマルクはそれを意識的にか、無意識的

にか分らないが、引用しただけではないのだろうか。あるいは彼の周囲で戦争経験者たちがそんなことをよく口にしていたという可能性は？　そもそも、『黒いオベリスク』という小説の中で、この言葉はどんな文脈で誰が言っているのだろうか？　ここで白状しなければならないのだが、私はこの作品のドイツ語の原書と英訳を最近ようやく入手したばかりで(言い訳がましいことを言えば、かつて『西部戦線異常なし』で一世を風靡した人気作家レマルクも、いまではほとんど読まれなくなっており、彼の『黒いオベリスク』なる小説のテキストを探し出すだけでもけっこう面倒なのである。日本語訳も1958年に出ているようだが、古書市場ではとんと見かけない)、このかなり長い小説を通読することはおろか、問題の箇所がどこに出てくるのか、確認することさえできていない。私のドイツ語力ではあと一年はかかるだろう。

そこで手っ取り早くはやっぱりインターネット、ドイツ語圏ではこの問題は議論されていないのだろうか、と思って、今度は、名古屋在住のわが敬愛するドイツ文学者に助けを求めたら、さっそくスターリンやレマルクの引用句に関して議論しているドイツ語のウェブサイトを教示してくださった。さび付いたわがドイツ語に鞭をうち、そのページを読んでみたら、いやあ、驚いた！　レマルクに先立って既に1925年に、クルト・トゥホルスキーという作家が、フランス人の機知の例として、「戦争？　さほど恐ろしいものとも思えませんね！　確かに一人の人間の死はカタストロフです。しかし数十万の死となると統計ですよ！」という言葉をフランス人外交官によるものとして(ドイツ語で)書きとめているというのだ。さあ、これこそ決定打か？

ところが……である。その指摘には、正確な出典も、フランス人外交官の名前も、彼がいつどこでそんなことを言ったのかも一切書かれていないのだ。「こんな警句、ちょっと気のきいた人間なら、誰でも思いつきそうなことさ。これ以上詮索しても無駄だよ」と投げ出してみたくなるのだが……。そもそも、何事にも明確な「起源」があるはずだという悪しき近代主義的な思考法自体が、間違っているのだろうか。日暮れて道遠し。わが出典探しの旅はまだ続く。